

## 北海道内の高等教育機関に所属する新入学生のひきこもり親和性とその関連要因の検討

著者	米田 政葉, 奥田 かおり, 志渡 晃一
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	13
号	1
ページ	3-8
発行年	2017-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00064465/">http://id.nii.ac.jp/1145/00064465/</a>

## 〔研究報告〕

## 北海道内の高等教育機関に所属する新入学生のひきこもり親和性とその関連要因の検討

米田 政葉<sup>1)</sup>, 奥田 かおり<sup>2)</sup>, 志渡 晃一<sup>3)</sup>

- 1) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科博士課程
- 2) 北海道医療大学看護福祉学部臨床福祉学科
- 3) 北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

## 要旨

2015年度12月・2016年5～7月に北海道内の保健医療福祉系、経済系、教育系、工学系、その他文系大学に所属する新入学生806名を対象に、ひきこもり親和性と関連要因に関する知見が一般化可能であるかを検討した。ひきこもり親和群の該当率は16.4%（男性16.0%、女性16.8%）であり、性・学部別で差はなかった。親和群の特徴について、ライフスタイルでは、生活習慣が不良で、抑うつ傾向を示し、首尾一貫感覚も低かった。過去の学校での経験について、友人や教員との関係が良くなかった。家庭では、両親の関係が不良であった。また、父母との関係が悪く感じていた。また、過保護であったとも感じていた。これらの結果は、先行研究と同様であり、大学生に一般化可能となると考える。また、新たに父母別で関連要因が異なっていること、学校施設、講義内容に不満足であること、日常生活のバランスが取れていない可能性が示唆された。

## キーワード

ひきこもり親和性, 新入学生, 生活習慣, ライフイベント, 対人関係

## I. 緒言

厚生労働省（2010）は、ひきこもりについて「様々な要因の結果として社会的参加（義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など）を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態（他者と交わらない形での外出をしてもよい）を指す現象概念」と定義している。また、国内に70万人程度いるとされている（内閣府、2010）。特徴について、男性に多いこと、家族関係、友人関係などの対人関係に不和を抱えていることが示唆されている。また、初発年齢は13～15歳前後及び18～20歳前後と二峰性が見られることが指摘されている（高畑、2003）。さらに近年では、長期化や高齢化が指摘されており、それらへの対応と同時に、予防的対応を行う必要性が指摘されている（KHJ全国ひきこもり家族会連合会、2014）。

ひきこもり予防の視点から近年、ひきこもり親和群（以下、親和群）の存在が指摘されている。親和群とは東京都（2009）の調査で初めて提唱されたものであり、ひきこもり親和性（以下、親和性）という、ひきこもりに対する理解性や心理的な類似性について示す4項目4件法からなる尺度により規定される。同調査

では、親和群について「ひきこもり群と似た心理的側面を有しながらも、ひきこもり状態にならずにとどまっているものたち」としている。内閣府（2010）が行った調査によると、国内の若者のうち約155万人がこれに該当するとされている。なお、同調査ではひきこもりの予備軍的存在である可能性を指摘している。

また、保健医療福祉系学生を対象に行われた一連の研究（志渡・上原・佐藤・堂端・米田・五十嵐、2013；米田・志渡、2015；米田・志渡、2016a）によると、親和群について、ライフスタイルが不良であり、抑うつ傾向を示し、Sense of Coherence（首尾一貫感覚；以下SOCとする）が低いことが示されている。また、過去の学校での経験について、男性は友人関係に関する要因、女性は学生生活全般の影響が大きいことを指摘している。また、過去の家での経験について、男性では社会性に関する要因、女性では家族機能が不全傾向にあった可能性が示唆されている。また、米田・志渡（2016c）が北海道内の複数の学部所属する学生を対象に行った研究では、学部間で親和群の該当率に差はないことを指摘している。このことから、他の学部でも保健医療福祉系学生を対象に行った研究と同様の要因が関連していると考えられる。

そこで本研究では、先行研究からさらに対象を拡大し、北海道内の複数学部に所属する新入生を対象に、親和性と関連要因について、これまでの知見が一般化可能であるかを検討することを目的とした。

## ＜連絡先＞

米田 政葉

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

E-mail: patalirol@yahoo.co.jp

## II. 方法

### 1. 調査・期間・対象

2015年12月および2016年5月～7月に北海道内の保健医療福祉系，経済系，教育系，工学系，その他文系学部に所属する新入学生862名を対象とし，無記名自記式質問紙による集合調査を行った。回収数は809名（回収率93.9%），有効回答数は806名（有効回答率99.6%）であった。

### 2. 質問項目

質問項目は1) 基本属性4項目，2) ライフスタイル13項目，3) 日常生活満足度9項目，4) 主観的幸福感4項目，5) ひきこもり親和性4項目，6) CES-D日本語版20項目，7) SOC日本語版13項目，8) 過去の学校での経験10項目，9) 過去の家庭での経験29項目の計106項目とした。

### 3. 分類・分析方法

回収した質問紙をもとにデータセットを作成した（表計算ソフトMicrosoft Excelを使用）。

分析に当たり，目的変数をSOC，説明変数を日常生活習慣，CES-D，親和性とし関連を検討した。

親和性は4件法4項目で構成される尺度であり，先行研究と同様に4～14点を「一般群」，15～16点を親和群と定義した。CES-Dは，4件法20項目であり，うつ気分（7項目），身体症状（7項目），対人関係（2項目），ポジティブ項目（4項目）の4つの下位尺度からなり，ポジティブ項目についてはすべて逆転処理を行った後，他の3項目との合計得点を算出する。得点は0点から60点までに分布し，16点未満に該当するものを「低うつ群」，16点以上に該当するものを「高うつ群」と定義した。SOCは7件法13項目であり，得点は1点から7点を配点し既定の方法で合計点を算出した。合計点数は13点から91点であり，13～45点を低値群，46～59点を中値群，60～91点を高値群と定義した。分析方法は，単変量解析として $\chi^2$ 検定及び，fisherの直接確率検定，多変量解析として性・年齢で調整したロジスティック回帰分析を行った。（IBM SPSS Statistics Ver. 23を使用）。

### 4. 倫理的配慮

対象者に1) 結果の公表に当たり，統計的に処理し個人を特定されることはないこと，2) 調査によって得られたデータは，研究以外の目的で使用しないこと，3) 調査に参加しないことで不利益を被ることはなく，かつ途中での同意撤回を認めるという条件を書面及び口頭で説明し，同意の得られたもののみ質問紙票に記入を依頼した。なお，本研究は北海道医療大学看護福祉学部倫理委員会の承認を得て行った（承認番号160N20019）。

## III. 結果

### 1. 対象の基本属性

対象の基本属性は保健医療福祉系401名（男性159名，女性241名，不明1名），経済系240名（男性130名，女性110名），教育系38名（男性0名，女性38名），工学系34名（男性25名，女性9名），その他文系93名（男性80名，女性12名，不明1名）であった。

### 2. 親和群の該当率

全体では16.4%であった。性別では男性16.0%，女性16.8%であり有意な差は見られなかった。専攻別の該当率は，保健医療福祉系学生13.5%，経済系学生21.3%，工学系学生11.8%，教育系学生21.1%，その他文系学生16.1%であり，学部間での有意な差は見られなかった。

### 3. 親和性と日常生活習慣の関連

親和性と日常生活習慣の関連について表1に示した。一般群と比較し親和群で該当率が有意に高かった項目は，人より悩みが多いと感じる，CES-D高値群の2項目であり，該当率が低かった項目は，現在健康であると感じる，喫煙習慣がある，栄養バランスを考える，SOC高値群の4項目であった。

多変量解析の結果，関連の独立性が見られた項目は，喫煙習慣がある，人より悩みが多いと感じる，CES-D高値群，SOC高値群の4項目であった。

### 4. 親和性と過去の学校での経験

親和性と過去の学校での経験の関連について表2に示した。一般群と比較し親和群で該当率が有意に高かった項目は，友達といるよりも一人であるほうが楽しかった，友達をいじめた，友達にいじめられた，いじめを見て見ぬふりをした，不登校を経験した，我慢をすることが多かった，学校の先生との関係が上手くいかなかったの7項目であり，該当率が低かった項目は，友達とよく話した，親友がいたの2項目であった。

関連の独立性が見られた項目は，親友がいた，友達といるよりも一人であるほうが楽しかった，友達をいじめた，いじめを見て見ぬふりをした，我慢をすることが多かったの5項目であった。

### 5. 親和性と過去の家庭での経験

親和性と過去の家庭での経験について表3に示した。家庭での体験・両親の関係について，一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は，家族に相談してもあまり役に立たなかった，引っ越しや転校をした，両親の関係が良くなかった，両親が離婚したの4項目であり，該当率が低かった項目は，小さい頃から習い事やスポーツ活動に参加していたの1項目であった。

関連の独立性が見られた項目は，小さい頃から習い

事やスポーツ活動に参加していた、引っ越しや転校をした、両親が離婚したの3項目であった。

母親との関係について、一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は、母親の躰が厳しかった、将来の職業などを母親に決められた、母親が過保護であったの3項目であり、該当率が低かった項目は、困った時は母親が親身に助言をしてくれたの1項目であった。

関連の独立性が見られた項目は、将来の職業などを母親に決められた、母親が過保護であったの2項目であった。

父親との関係について一般群と比較し親和群で該当率が高かった項目は、父親の躰が厳しかった、父親は過保護であった、父親と自分の関係が悪くなかった、父親から虐待を受けたの4項目、該当率が低かった項目は、困った時は父親が親身に助言をしてくれたの1項目であった。

関連の独立性が見られた項目は、父親の躰が厳しかった、困った時は父親が親身に助言をしてくれた、父親と自分の関係が悪くなかったの3項目であった。

### 6. 親和性と日常生活満足度の関連

表4に親和性と日常生活満足度の関連を示した。一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は、講義に満足している、学校施設に満足している、先輩との関係に満足している、同級生との関係に満足している、学校生活全般に満足している、家族・学校以外の友人知人に満足している、家族との関係に満足している、私生活全般に満足しているの8項目であった。

関連の独立性が見られた項目は、学校施設に満足し

ている、家族・学校以外の友人知人に満足しているの2項目であった。

### 7. 親和性と学校と日常生活のバランス・主観的幸福感の関連

表5に親和性と学校と日常生活のバランス・主観的幸福感の関連について示した。一般群と比較し親和群で該当率が低かった項目は、学業と学業以外の生活をうまく両立させている、これまでの人生で人に恵まれていると感じる、自分は運が良いほうであると感じる、幸福であると感じるの4項目であった。

関連の独立性が見られた項目は、幸福であると感じるの1項目であった。

### IV. 考察

親和群の該当率は全体で16.4%であった。内閣府の調査の二次解析(米田・志渡, 2016b)結果において、同年代に該当する15~19歳の群と比較し高い該当率であった。また、保健医療福祉系学生を対象とした一連の研究と比較し、同程度の該当率であった。性別で見ると、男女ともに15~19歳の群と比較して高い該当率であったと考える。一方、先行研究(東京都, 2009; 内閣府, 2010)において、性別で該当率が異なることが指摘されているが、本研究では性別での差は見られなかった。また、学部間での該当率についても差は見られなかった。これらの結果から、親和群の該当率について先行研究で指摘されている保健医療福祉系学生のみならず、大学生全般で高い可能性が示唆されたと考える。これは、米田他の研究(2016c)を支持する

表1. 親和性とライフスタイルの関連

	n(%)		p
	一般群	親和群	
現在健康であると感じる	674(100)	132(100)	*
運動習慣がある	610(90.6)	111(84.1)	
週5日以上飲酒する	282(42.0)	47(35.6)	
喫煙習慣がある	7(1.0)	1(0.8)	
朝決まった時間に起きられる	22(3.3)	0(0.0)	* §
深夜まで起きている	470(69.7)	87(65.9)	
昼夜逆転の生活をしている	503(74.6)	94(71.2)	
睡眠時間が良好である	97(14.4)	28(21.2)	
普段朝食を食べる	394(58.5)	78(59.1)	
栄養バランスを考える	487(72.4)	91(68.9)	
人より悩みが多いと感じる	466(69.1)	78(59.1)	*
趣味がない	46(6.8)	41(31.1)	* §
ダイエットをしている	29(4.3)	11(8.3)	
CES-D高値群	261(38.7)	54(40.9)	
SOC高値群	289(45.8)	105(82.7)	* §
	157(24.2)	5(3.9)	* §

\* : p<0.05 by  $\chi^2$  検定

§ : p<0.05 by ロジスティック回帰分析 (ステップワイズモデル, 性・年齢で調整)

表 2. 親和性と過去の経験の関連 n(%)

	一般群 674(100)	親和群 132(100)	p	
友達とよく話した	643(95.4)	117(88.6)	*	
親友がいた	595(88.3)	103(78.0)	*	§
友達といるよりも一人でいる方が楽しかった	180(26.7)	76(57.6)	*	§
学校での経験 友達をいじめた	23(3.4)	15(11.4)	*	§
友達にいじめられた	44(6.5)	20(15.2)	*	
いじめをみて見ぬふりをした	77(11.4)	33(25.0)	*	§
不登校を経験した	87(12.9)	29(22.0)	*	
我慢をすることが多かった	270(40.1)	83(62.9)	*	§
学校の勉強について行けなかった	190(28.2)	43(32.6)		
学校の先生との関係が上手くいかなかった	90(13.4)	38(28.8)	*	

\* : p<0.05 by  $\chi^2$  検定

§ : p<0.05 by ロジスティック回帰分析 (年齢で調整, 各群ごとに変数選択)

表 3. 親和性と過去の家庭での経験の関連 n(%)

	一般群 674(100)	親和群 132(100)	p	
家庭での体験・両親の関係 何でも自分で決め, 家族に相談する事は無かった	92(13.6)	22(16.7)		
家族に相談しても, あまり役に立たなかった	101(15.0)	37(28.0)	*	
小さい頃から習い事やスポーツ活動に参加していた	493(73.1)	85(64.4)	*	§
引越しや転校をした	76(11.3)	33(25.0)	*	§
経済的に苦しい生活を送った	185(27.4)	41(31.1)		
大きな病気をした	63(9.3)	13(9.8)		
我慢をすることが多かった	65(9.6)	18(13.6)		
両親の関係が良くなかった	44(6.5)	19(14.4)	*	
両親が離婚した	137(20.3)	54(40.9)	*	§
母親とは何でも話すことが出来た	350(51.9)	62(47.0)		
困った時は, 母親が親身に助言をしてくれた	356(52.8)	67(50.8)	*	
母親の躰が厳しかった	68(10.1)	23(17.4)	*	
母親と自分の関係が良くなかった	63(9.3)	15(11.4)		
将来の職業などを母親に決められた	25(3.7)	14(10.6)	*	§
母親が過保護であった	96(14.2)	34(25.8)	*	§
母親が過干渉であった	65(9.6)	20(15.2)		
母親は学校の成績を重視していた	128(19.0)	36(27.3)		
母親と死別した	5(0.7)	2(1.5)		
母親から虐待を受けた	3(0.4)	2(1.5)		
父親とは何でも話すことが出来た	182(27.0)	27(20.5)		
困った時は, 父親が親身に助言をしてくれた	282(41.9)	34(25.8)	*	§
父親の躰が厳しかった	61(9.1)	23(17.4)	*	§
父親と自分の関係が良くなかった	63(9.3)	33(25.0)	*	§
将来の職業などを父親に決められた	19(2.8)	7(5.3)		
父親が過保護であった	52(7.7)	21(15.9)	*	
父親が過干渉であった	22(3.3)	7(5.3)		
父親は学校の成績を重視していた	75(11.1)	22(16.7)		
父親と死別した	19(2.8)	4(3.0)		
父親から虐待を受けた	5(0.7)	5(3.8)	*	

\* : p<0.05 by  $\chi^2$  検定

§ : p<0.05 by ロジスティック回帰分析 (年齢で調整, 各群ごとに変数選択)

表4. 親和性と日常生活生活満足度の関連

n(%)

	一般群 674(100)	親和群 132(100)	p
講義に満足している	419(62.4)	69(52.3)	*
学校施設に満足している	417(61.9)	63(47.7)	* §
教員との関係に満足している	325(48.3)	52(39.4)	
先輩との関係に満足している	474(71.2)	77(58.8)	*
同級生との関係に満足している	561(83.5)	94(71.2)	*
学校生活全般に満足している	485(72.3)	74(56.1)	*
家族・学校以外の友人知人に満足している	560(83.7)	91(68.9)	* §
家族との関係に満足している	557(83.0)	93(70.5)	*
私生活全般に満足している	531(78.8)	76(57.6)	*

\* : p<0.05 by  $\chi^2$  検定

§ : p&lt;0.05 by ロジスティック回帰分析

(ステップワイズモデル, 性・年齢で調整 学校生活全般に満足している, 私生活全般に満足しているを除外した)

表5. 親和性と学校と日常生活のバランス・主観的幸福感の関連

n(%)

	一般群 674(100)	親和群 132(100)	p
学業と学業以外の生活をうまく両立させている	370(55.0)	59(45.0)	*
これまでの人生で人に恵まれていると感じる	552(81.9)	94(71.2)	*
自分は運が良いほうであると感じる	440(65.3)	65(49.2)	*
幸福であると感じる	553(82.2)	78(59.1)	* §

\* : p<0.05 by  $\chi^2$  検定

§ : p&lt;0.05 by ロジスティック回帰分析 (ステップワイズモデル, 性・年齢で調整)

結果であった。

親和群の特徴について、ライフスタイルでは、主観的健康観が低く、栄養バランスを考えた食習慣を送っておらず、抑うつ的であり、首尾一貫感が低かった。一方、喫煙習慣があるものは少なかった。この結果について、志渡他(2013)や米田他(2016a)の研究と比較し、おおむね一致する結果であった。しかし、先行研究では見られなかった、栄養バランスを考えた食習慣との関連が見られた点については、検出力が増したためであると考え。また、先行研究で関連の指摘されていた飲酒習慣との関連が見られなかったことについては、本研究の対象が18~19歳前後であることが関連していると考え。

過去の学校での経験では総じて友達とあまり話しておらず、親友がいなく、友達といるよりも一人であるほうが楽しかったと感じていた。また、いじめの加害経験、被害経験ともにあり、さらに傍観経験もあった。不登校を経験しており、学校で我慢していたと感じていた。また、先生との関係についても上手くいかなかったと感じていた。これは、先行研究(東京都, 2009; 内閣府, 2010; 米田他, 2015; 米田他, 2016b)を支持する結果であった。

過去の家庭での経験や両親の関係については、家族に相談してもあまり役に立たなかったと感じており、

両親の関係について不良であり、両親の離婚を経験していた。さらに、小さい頃から習い事やスポーツ活動に参加しておらず、引っ越しや転校を経験していた。この結果は、先行研究(東京都, 2009; 内閣府, 2010)を支持するものがあると考え。

親との関係について、父母ともに共通していた要因は、親身に助言をしてくれたと感じていなかったこと、躰が厳しかったと感じていたこと、過干渉であったとも感じていた点である。

母親との関係についてのみ関連が見られた要因は、将来の職業などを決められたと感じている点であり、父親との関係でのみ関連していた要因は、虐待を受けたと感じていた点である。先行研究では、親との関係について父母別での検討を行っていないため、厳密な比較は困難であるが、東京都(2009)や内閣府(2010)の行った調査とほぼ一致する結果であったと考え。また、父母別で関連要因が異なる可能性が示唆されたことから、今後さらに性別での父母別の関連を検討する必要がある。日常生活満足度との関連については、講義や学校施設に満足しておらず、先輩、同級生との関係についても不満足であり、学校生活全般に満足していなかった。また、家族・学校以外の友人知人との満足度についても低く、家族との関係に不満足であり、私生活全般に満足していなかった。また、日常生活の

バランス・主観的幸福感については、学業と学業以外の生活をうまく両立できておらず、これまでの人生で人に恵まれていると感じず、自分は運が良いほうであると感じておらず、幸福であるとも感じていなかった。内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット（2012）が全国の15歳以上のもので6451名を対象に行った調査によると、ニート・ひきこもり傾向にあるものほど、幸福感が低いことが示されている。親和群をひきこもり予備軍として捉えると、本研究においても類似の結果が得られたと考える。

本研究の結果から、健康な生活習慣を保持し、対人関係について満足度を高めるような支援を行うとともに、過去のライフイベントにおける辛い体験に対し十分に向き合っていけるようにすることが、ひきこもりの予防につながる可能性が示唆された。

本研究の有効性は、北海道内の新入学生における親和性とその関連要因について検討を行い、先行研究で確認されている関連要因について一般化できる可能性が示された点、ひきこもり予防への有用な示唆を得た点、過去の家庭での経験における親との関係について父母別での検討を行った点である。

本研究の限界は北海道内の学生のみが対象である点、新入学生のみである点、過去の学校での経験について小中高等学校段階別での検討を行っていない点である。今後、地域間比較を行うこと、両親との関係などについて性別に検討を深めること、大学生のみならず、高校生についても同様の調査を行うこと、調査票についてさらに詳細に検討が行えるよう改善することが課題である。

## V. 謝辞

本研究の趣旨をご理解いただき、ご協力くださった皆様に心より感謝いたします。

## 引用文献

- 厚生労働省（2012.9.1）. ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン. [http://www.ncgmkohndai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm\\_hikikomori.pdf](http://www.ncgmkohndai.go.jp/pdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf)
- 内閣府政策統括官. 若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する調査）（2012.9.1）. [http://www8.cao.youth/kenkyu/hikikomori/pdf\\_index.html](http://www8.cao.youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html)
- 志渡晃一, 上原尚紘, 佐藤巖光, 他（2013）. 高等教育機関に所属する学生のひきこもり親和性と抑うつ症状, OCの関連. 北海道医療大学学部学会誌. 9(1), 121-124.
- 高畑 隆（2013）. 埼玉県における「ひきこもり」の実態. 精神医学. 45(39), 299-302.
- 特定非営利活動法人KHJ全国ひきこもり家族会連合会（2015.4.1）. 平成25年度 セーフティネット支援対策

- 等事業費補助金 社会福祉推進事業ひきこもりピアサポーター養成・派遣に関するアンケート調査報告書. (<http://www.khj-h.com/pdf/13houkokusho.pdf>)
- 東京都青少年・治安対策本部（2012.9.1）. 平成19年度若者自立支援調査. [http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/14\\_jyakunen/jittaihoukokusyo.pdf](http://www.seisyounen-chian.metro.tokyo.jp/seisyounen/pdf/14_jyakunen/jittaihoukokusyo.pdf)
- 米田政葉, 志渡晃一（2015）. ひきこもり親和性に関する検討. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 11(1), 43-47.
- 米田政葉, 志渡晃一（2016a）. 保健医療福祉系学生におけるひきこもり親和性とライフスタイル, CES-D, SOC に関する性別での検討. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌. 12(1), 49-52.
- 米田政葉, 志渡晃一（2016b）. ひきこもり親和性の関連要因に関する性別での検討—若者の意識に関する調査（ひきこもり実態調査）の二次分析より—. 北海道社会福祉学研究. 36, 31-37.
- 米田政葉, 志渡晃一（2016c）. 北海道内の高等教育機関に所属する学生のひきこもり親和性の検討. 社会医学研究第57回日本社会医学学会総会講演集.

受付：2016年11月30日

受理：2017年2月3日